

槐

かい

岡井省二創刊

平成16年6月号

平成十六年六月一日発行 第十四巻第六号
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

通巻第一五六号（毎月一日発行）



黄道光

高橋将夫

春風や象牙犀角牛の角

山焼の後の始末をしてをりぬ

しやぼん玉吹かれて地獄めぐりかな

蛤の袋に紐を掛けてをり

養花天きつねうどんは私だけ
葱坊主大胆にして細心に
三面鏡右側の吾あたたかし
蛤のてつきり舌と思ひたる
鳥の巢に鳥あるといふ思ひ込み
本当のところは朧月夜にて
鳥帰る黄道光のかなたかな

桐 火 鉢

岩 下 芳 子

雪 洞 の 径 を ゆ き け り 初 桜
春 日 の 街 の 易 者 の 泥 鱈 髭
石 に 降 る 春 雨 に 色 あ り に け り
築 山 の 芝 生 の 色 や 菜 種 梅 雨
山 の 端 の 近 く な り た る 春 入 日
辛 夷 咲 き 和 毛 の 萼うてな の 湿 り 可 可
春 の 土 丸 め て 捏 て を り に け り
灯 台 の 光 の 中 の 朧 可 可
霾 や 聖 観 音 の う す き 髭
春 昼 の 笛 吹 き 葉 缶 円 き 音

特別作品

飛石を七つ来たりし鳥雲に
三角の水尾引く春の鴨の数
サーカスのテントを渡る青葉風
海桐咲く水軍の島風強し
飛魚やなかなか太き土佐の雨
杓ひさかきの花盛んなり瓦斯臭し
湖の際に仕掛けし鰻筒
話すことなくも撫である桐火鉢
足元に鮠とび出すブラシの木
花枇杷の香のあるところハーモニカ

槐安集

市場基巳

豚舎あるところ冬日のよく當り
夕焼となり寒鴉かまびすし
雨さみしさみしと猫の夫通る
毎日の鴉のさわぐ春夕焼
わが背丈のびゆく梅を見てあれば

水野恒彦

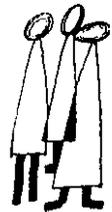
暮出でていま白日の深くあり
啓蟄のゆくほどに土匂ひけり
三月のひかりとなりし靈芝かな
たくあんをはりはりと噛み春愁ふ
紅梅の闇 左大臣 右大臣

石脇みはる

三月の足元よろけ平泉
鋭敏と愚鈍の同居山桜
にはとこの花のこぼるる墳墓かな
巻紙を開いてゐたり花の山
西山に日の及びたるさくらかな

竹内悦子

期四十八歳にて逝く
白骨と化して辛夷のさかりなり
三月や骨壺に入る喉佛
春宵の真つ白な骨拾ひをり
七輪の捨てられてある彼岸かな
葬列の通りすぎたるさくらかな



木下野生

薄氷こはれてただの氷なり
春の日や一本立つて櫂の木
土砂降りのあひだの小降り露の臺
大千瀉雨降る音のしてゐたり
陽炎や焼香台へひとりづつ

中島陽華

春浅し会津蠟燭灯したる
よみがへる朱雀門なり松の花
すかんぽを噛みま昼間の歡喜天
声明流れ青空の忘れ雪
崑山の玉か古梅の花つけて

延広禎一

跳ね橋を渡つてゐたり涅槃西風
雛の夜天竺鯛の捌かるる
春祭いま張り潮となつて来し
胞衣塚えなや菜の花の沖はるかなる
隕石に湿りありけり涅槃西風

栗栖恵通子

魚島や綿棒あたま揃ひをり
艮にさくらさくらや首枕
花片がはりつく重ね硯かな
緑青をまとひて蛇の出でにけり
てつぺんに鷺の降り来る朧かな

加藤みき

かいやぐらの方より大きき鳥ひとつ
浮雲や 高み高みし蝶 一頭
春の闇森にうずまく万のこ糸
ひよつとこの口象の鼻石 鹼玉
漆黒の足を抱きて 鵠 帰る

大島翠木

大鍋に白湯沸く鳥の恋しばらく
鈴蘭のびつしり芽立つ秘佛かな
校舎の西にはくれん満ちみちぬ
藪中の葉蘭を切りに啄木忌
春陰の白鳥に雨降りだしぬ



槐市集

岩下芳子

フリージャを挿して窓口休診日
少年の覗いてゆきし雛の間
春時雨とほり梵字の滲みけり
画用紙をはみ出してゐるチューリップ
一本の桜大樹の気を貰ふ

植木戴子

象の鼻杉の花芽を数へをる
囀りや大和三山雨上る
猫柳の大きく揺れし春の雷
畝合いの土起しをる男かな
春光に追ひかけられし埃かな

植松美根子

啓蟄や出荷の苗を掘りおこす
満月の二時間あとの春嵐
戦艦に手は振るまいぞ花菜漬
夕餉まで少し間のあり白木蓮
川音のなき流れかな諸葛菜

宇田喜美栄

来し方や山川のあり雛納む
田の神を迎へてゐたり山櫻
一陣の風や帰雁のつぎつぎと
春雪やふるさと切手買うてをる
亀石の朧月夜となりにけり



槐集

高橋将夫選

白梅の奥紅梅に続きたる
枚方

雨村 敏子

涅槃会やいたち威しのあわび殻
宗像

南 一雄

かいやぐら鏡の前をよぎりける
木蠟の固まつてをり杉の花

野ざらしのひとつふたつや目借時
大日へ磯巾着の潮とばす

和らうそくの影に入りたる春蚊かな

舌の根の乾ける亀の鳴くことよ

春風駘蕩火星に水の跡

壺焼きのあぶく翁となりにける

総門の一位の大樹涅槃西風

谷村 幸子

白梅に弓立てかけてありしなり
岡崎

本多 俊子

弘法の寺に生まれし雀の子

蛰雷や長持の蓋ふた半開き

春くや春の西瓜の種にぎる

春の日の犀と生まれて笑ふなり

荃立の父の畑に石拾ふ

颯ひかみにかげるふ揺れてをりにけり

今啼くは雉かと思ふ夜明けかな

ゆく春の裏かへりたる海星ひとでかな

はくれんの日にふるへつつ冷たき花

黒田 咲子

北開き黄金の雲のわたりかな
枚方

中野 京子

蛇穴を出て眼力のいかほどに

雛の日の日のひろがりし広き坂

ロスタイム二分トンビの恋の笛

青い目の眠る人形灯の臍

囀りや空瓶の口こちら向く

ひろごりし湯気の椀なり落の花

花すみれまはり猫好きばかりなり

亀鳴いてジクソーパズルの絵解きかな

銀河往来 高橋将夫

Ⅱ 『槐』の俳句 Ⅱ

「槐集選評」

春風駘蕩火星に水の跡 雨村 敏子

火星に生命体が存在するか。水が有ったか。もし、火星に春があつたとしたら。春風駘蕩で空想科学から詩の世界へ。

結社誌『峠』（酒井秀穂主宰）の「受贈主要俳誌雑詠巻頭句紹介」で十数誌の雑詠巻頭句が紹介されている。その中から三誌（A・B・C）につき作品だけを並べてみた。この中に「槐集」の作品が含まれているが、どれだかお分かりだろうか。

A 蟬しぐれのいつせいに止む空の穴

天地を叩く男の祭打鼓

山肌を夏霧のぼり死者生者

天と地を結ぶ炎の祭かな

ときじくの風に声あり青葉木菟

B 盆の来る親しき人は皆逝きて

大夏野後生大事に免許証

月見草四弁の花びら楚々とゆれ

台風の北海道に爪立てる

何処見ても稲穂立ちしてをりぬ

C わたすげやマッターホルン映る沼

ヨーデルに手を取り踊る村の人

アルプスの氷壁夏の日を返す

騒雨中樹の下にをり放ち牛

ゼラニウム咲く教会の高き窓

正解はA。中野京子氏の作品である。作品の優劣を競つ場ではなさそうなので、その点にはふれないが、少なくとも「槐」俳句の特徴はよく分かっていただけだと思う。俳句は存在の詩。

総門の一位の大樹涅槃 西風 谷村 幸子
格調が高い。恰幅がある。姿がよい。広がりがある。格好をつけたい嫌みがない。

蛇穴を出て眼力のいかほどに 黒田 咲子
穴を出たばかりの蛇が、その眼力のほどを問われている。「春は来たばかり。まだまだこれからが本番」と蛇は言ったとか。

舌の根の乾ける亀の鳴くことよ 南 一雄
舌の根も乾かぬうちから、よくもまあぬけぬけと…。いや、この亀の舌の根は乾いていた。俳諧。

春の日の犀と生まれて笑ふなり 本多 俊子
犀に生まれ替わって、春の日のもでにこにこ笑っている。まるで、故省二先生のようなではないか。

北開き黄金の雲のわたりかな 中野 京子
長い冬が終って北窓を開けたら、黄金の雲がたなびいている。なんとも幸先のよい、めでたい景ではないか。

（以下略）